

枕草子の形態に関する一考察

池

田

龜

鑑

目次

- 一、枕草子の「流布本」とは何か。……………三
- 二、枕草子の系統はこれを單に「分類型」と「雜纂型」とに統一して論ずること能はず。……………七
- 三、枕草子の現存諸本はいづれも後人の改修本なり。……………二六
- 四、原形推定に於ける印象批評を排す。……………三三
- 五、枕草子の原形は果して「雜纂型」なるか……………三七

一 枕草子の流布本とは何か

清少納言枕草子には異本が甚だ多い。近來此等の異本が學者の注意に上つて來るやうになつたのは喜ぶべきことである。しかるにそれ等の研究論文に「流布本」といふ言葉がきはめて不明瞭な意義をもつて使用されてゐるのは遺憾なことである。この「流布本」なる言葉はあらゆる古典研究に於て、ほとんど便宜的に使用されてはゐるもの、しかし、少くとも枕草子の形態を論ずるが如き、嚴密なる考證を要すべき論文に於ては、何等學術的なる吟味も經ず不明瞭なまゝに使用せられてゐるやうではこまる。

元來「流布本」とは、一般的に最もよく流行してゐる本と考へられ易いが、流行とは何であるかが、既に一つの問題である。質的に信用される範圍が廣いと云ふのか、量的に賣れ方が多いといふのか、それともこの二者の合致を意味するのと同様の不明である。よいものは必ず流行するといふやうな説を出す人もあるときくが、それらは苟も學徒の口にすべき言葉ではない。流行といふ事實が、決してその本のもつ本質のみによつて決定されるものでないことは明白である。例へば、源氏物語の鎌倉時代に於ける流行本と思はれる河内本は、それ自身の學術的價値といふよりも、むしろ學者としての親行一派の信望によつて流行したらしく、室町時代以後の流行本と思はれる二條家青表紙本は、同じく實隆・宗祇等の宣傳によつて人爲的に流行せしめられたやうである。

次に右源氏物語諸本の流行狀況によつても分るやうに、所謂流布本といふものは時代によつて異なるのである。王朝時代の流布本と、鎌倉時代の流布本と、徳川時代の流布本とは自ら異なるのである。もし古今集の系統を論ずる論文に

於て、定家の貞應本古今集が、近世以後特に多く流行したとの素朴なる理由のもとに、直ちに各時代全體に互り、貞應本の代名詞として「流布本」の名を濫用したとするなら、その論文はその事實一つによつて、も早や學術的に承認され難いであらう。同様に北村季吟の「春曙抄」を「流布本」と稱するが如き簡單なる頭腦をもつて、鎌倉時代以前の枕草子諸本の系統を論ずる人があるとすれば、それは決して學問的とは云へないであらう。まして、「安貞二年奥書本」と「春曙抄」とを同系統の本と見なし、これを混同して單純にも「流布本」と概稱するやうな論者があるとすれば、それは全く枕草子諸本を知らない人であり、少くとも「安貞二年奥書本」を讀んだことのない人と解釋しなければならぬ。又前田家本と堺本及び類従本とが、分類形式をもつてゐるゆゑに、單にその事實のみによつて、直ちに同系統の本と速斷するやうな議論があるとすれば、それは未だ兩書の内容を讀んだことのない人の議論と云はねばならぬ。枕草子の異本關係が左様な簡單な形式のみの問題でないことは常識にも分る筈である。

次に枕草子の原形はどうでもよい、寧ろ重んずべきは我々が枕草子として認識してゐるもの——即ち春曙抄によつて代表された流布本である。我々は目にふれ得ない實體そのものよりも、屢々目にふれ、たとひ錯覺であつても、實體そのものとして認識してゐるものの方が、より重要であるといふ議論も成り立つであらう。これは一應考へなければならぬ意見である。もし清少納言自筆の本が、現存諸本よりも著しく異つたものであり、それが成立後間もなく祕庫にかくれ、一千年後の今日偶然發見されたとしても、我々は從來認識してゐた枕草子——自筆本に遠きにせ、物を、あながちに無價値として捨て去ることは出來ないであらう。なせなれば、そのにせ、物が本物と信ぜられて、長い間一つの動かすことの出來ない文學思想上の地位を占めて來たからである。

しかし、我々は古典文學を明かにしようとするものの立場として、さういふ場合せつかく見出された枕草子の最原

始なる形を、單に歴史的な價値を重しとするの故を以て輕視してよいであらうか。正しいものを早く正しいと認識していけないであらうか。例へば更級日記の所謂流布本は室町時代から錯簡を生じ、錯簡のまゝで數百年を経過した。しかるに定家自筆本が発見されてその原形が分明した今日、我々は歴史的な影響を重しとして、なほあやまれる流布錯簡本を固守すべきであらうか。元來古典の歴史的性質はある限られたる時代に於てのみ考へられ得るものである。枕草子について云へば、鎌倉時代には三卷本（安貞二年奥書本）が、室町時代には所謂五卷本（もと二卷傳能因法師所持本）が、徳川時代には春曙抄本（大體五卷本の系統）が、現代には主として金子元臣氏改訂本（春曙抄そのものにあらず）が最も多く流布してゐるやうである。歴史の示す事實よりすれば、一つの流行本の世に行はれる期間は、さして長いものではない。又相當長いとしても日本民族の將來はより以上もつともつと長い筈である。これを思へばわづか數十年、長くとも數百年の壽命を保つてゐるからと云つて、日本民族の將來永久に誤れるにせ、物を強要し、より正しき最原始の形がありながら、みすみす之を否定するが如きは、賞讃すべきことであらうか。自分の見てゐたものが夢であると知りながら、——たとひそれが相當長い夢であつたにせよ——なぜ早く現實にめざめていけないであらうか。我々は、古典の原始的なる性質よりも、歴史的なる性質を重んじてこれに執着するが如き見解に、遺憾ながら贊同することは出来ないのである。

古典の歴史的なる性質を重しとする主張は、本文批評的研究を無用視するかの如く解せられる。もし果してさうであるならば、あまりにも馬鹿々々しいことではあるが、一言費しておかねばならない。一體古典の歴史的性質といふものは、換言すればある時代に行はれた流布本の性質といふものは、如何なる手段によつて明らかになるのであるか。例へば枕草子について云ふならば、現代は主として金子氏改訂本、徳川時代は傳能因所持本、鎌倉時代は安貞二

年奥書本が行はれてゐるといふ事實は、又徳川時代以後に於て傳能因所持本も安貞二年奥書本も、決して廣く流布してゐないといふ事實は、約言すれば、枕草子傳來の歴史的事情なるものは、本文批評的研究——特に異本研究以外の方法によつてどうして明かにされ得るであらうか。現在流布してゐる金子氏改訂の活版本を如何ほど鑑賞すると、批評するとも、かくの如き歴史的事實がどうして發見され得るであらうか。もし發見されるならそれは驚くべき魔術である。本文批評的研究は、むしろ歴史的性質を明かにすることが本務であり、その作業をつき進めることによつて、原始的性質に肉迫せんとする最も地味な努力なのである。一品宮修子内親王本、季經卿本等の存在が暗示せられ、傳能因所持本、前田家本、安貞二年奥書本、同異本、堺本等の歴史性が明かになつたのは、全く本文批評的研究の賜である。殊に五卷本の性質が二卷本の變形であること、細川家藏の幽齋自筆本が三條西家本を傳寫したものであること、三條西家本が傳能因所持本の系統の最も古い寫本であること等の重要な歴史性を明かにしたのは、要するに本文批評的研究そのものであつた。決して思想的研究ではない。思想的研究なるものは却つて異本研究の結論によつて自己の所論に客觀性を附したのである。これを源氏物語について云ふに、もし「湖月抄」をもつて「流布本」と考へ、ここにも歴史性を認めんとする人があるなら、その人はもはやそれだけで源氏物語の形態を論ずる資格はないのである。なるほど「湖月抄」は徳川中期以後、長く流布本的性質をもつてゐた。しかし、「湖月抄」は將來源氏物語の流布本であり得ないであらうやうに、過去に於ても、少くとも室町時代以前の流布本ではなかつた。宵柏自筆本、三條西家證本、周桂自筆本等は室町時代に於ける重要な通行本ではあるが、これ等が青表紙本、河内本及びそれ以外の本の系統と如何なる關係にあつたか、又二十數部の諸本が存在したといふ鎌倉初期の通行本は如何なる性質を有してゐたか等の歴史性に關する問題は、異本研究によつてのみ明かにされる問題である。思想的研究が、これ等の問題に如

何なる解決を與へ得たか教へを受けたきものである。重ねていふ、古典の歴史的性質は、本文批評的研究によつてのみ確實にされ得るものである。

さて、我々はこの項について結論をのべなければならぬ。枕草子の流布本は時代によつて異なる。「春曙抄」は決して總括的な意味で「流布本」と云はれてはならない。「三卷本」も亦同様である。概括的な意味での「流布本」は、他の多くの古典と同様に、枕草子には存在しない。分類型にあらざる「春曙抄」「三卷本」その他の諸本を一括して「流布本」となすが如き主張は、枕草子の異本關係を全然知らない人の意見である。そしてかくの如きは、嚴密な本文批評的研究を輕視して、大まかな主觀的な印象的な論斷を急ぐ所から生じた獨斷的見解にすぎない。

二 枕草子の系統はこれを單に「分類型」と「雜纂型」とに統

一して論ずること能はず。

枕草子には異本が甚だ多いが、これを整理して系統立てようとする際に三つの方法が考へられ得る。即ち

- 一、本文の差異を眼中に置かず、單に形式の類似によつて系統立てるもの。
 - 二、形式よりも主として本文の差異によつて系統立てるもの。
 - 三、形式と内容との兩者を合はせ考へつゝ系統立てるもの。
- の三種の方法が存すると思はれる。

右の中(一)は最も常識的な方法であつて、複雑きはまる異本關係を有する枕草子を、單に外見的なる——それもきはめて大まかな意味に於ての——形式によつて區別し、一を雜纂型、他を分類型と見るのである。安貞二年奥書本、

二、枕草子の系統はこれを單に「分類型」と「雜纂型」とに統一して論ずること能はず

春曙抄本、盤齋抄本、傍註本、古活字本、慶安刊本等を全部包括して雜纂型となし、これ等を同系統と目し（この見解が甚しい誤謬であることは後に詳説する）これ等に「流布本」といふ名稱を與へる一方、前田家本、堺本、類從本等にある特殊の組織の存する所から、これ等を包括して同一類となし、「流布本」に對して「異本」といふ名稱を與へるのである。（この見解が全然學術的根據のないことも後に詳説する）

次に（二）は章段の順序配列即ち形式をあまり重く見ず、本文の異同に中心をおき、そこから系統を立てようとする方法であつて、この方法には綿密なる諸本の本文校合が基礎となるだけに、（一）のやうな大ざつばな非學術的態度に比すれば眞面目ではあるが、しかし全然章段の順序配列を無視することは決して正當といふ譯に行かない。

枕草子の現存諸本には一として原始の形式を傳へるものはない。（このことについては項を改めて考證する。）原本が一度ばらばらになつたのを後人がまとめたと見るより外に仕方がない。尤も春曙抄の中の都合のよささうな一部分をえらんで、これに印象主義的な解釋を下すことから、その本文には神韻漂渺たるものがあるとして、春曙抄全體を直ちに原形であると考へることも出来るかも知れないが、かゝる主觀的な見解には、少くとも我々は絶対に贊同することは出来ない。平安朝末期に於て少くとも三種の異本の對立を生じてゐた（この事については後にのべる）ところの枕草子は、その異本發生の理由を決して單に草稿本、淨書本の存在のみに歸することは出来ない。この草子の異本は、勿論著者の草稿、淨書、後日の修補又は後人の改修増補等、種々なる事情のもとに生れたことは、ほとんど疑ふことが出来ないが、それと同時に、むしろそれ以上に原本の組織を後人が變更したといふ事情が重要である。普通流布本の名稱のもとに、春曙抄と同系統と見てある三卷本は、これを春曙抄に比すれば、本文の異同甚しく、章段の順序も非常に異なるのである。本文の相違は別な事情に原因するものであらうが、章段の相違は編輯者を異にすることに

起因するとしか考へられないのである。前田家本と類従本との関係もまた同様である。

かくの如く編輯者の異なる所から異本の生ずる例は、ひとり枕草子のみならず、伊勢物語の如き歌物語、猿丸集、躬恆集、實方集、和泉式部集等の如き私家集の場合にも同様に云はれ得ることである。就中、躬恆集に於て類従本又は歌仙家集本は各異系統でありながら、しかも雜纂的である點に於て一致し、圖書寮所藏の二種の本はこれも亦各異系統でありながら、組織的である點に於て一致してゐる。この關係は枕草子の異本關係とほぼ事情を等しくすると考へられるのである。又、「十六夜日記」の卷末に存する雜纂的部分、「異本赤染衛門集」の卷頭に存する紫式部日記抄出歌の如きは、各々それ等の原典とは何の關係もなく、後人によつて便宜機械的に綴ぢあはされたものであることが、異本研究の結果明白になつた。ことに興味あることは、紫式部日記の歌を卷頭に有する「異本赤染衛門集」は題簽に「日記歌」とあるため、それが「赤染衛門集」であることに氣づかれなかつたのであるが、本文研究の結果、やうやくその正體が分り、その成立の経路が明白になつた。即ち紫式部日記の歌の部分は、もと「紫式部集」の卷末に、「日記歌」として記出したものを機械的にとぢ合はせてあつたが、何かの機會にそれがばらばらに分離したのを、誤つて「異本赤染衛門集」の卷頭に綴ぢこんだ上に、不用意にも題簽に「日記歌」と書いてしまつたのである。これ等は枕草子とは別なものであるが、わが中古の古典作品に於ては、後人の不用意なる編輯又は整理によつて、原形とは著しく異なる形が生れるのが普通であつたから、一言参考までに述べておくのである。

さて枕草子現存諸本が果して後人の手の加はつたものであるとするなら、異本發生の事情を左の三つに大別することが出来るであらうと思ふ。

(一) 原本そのものに已に異本あり。

二 枕草子の系統はこれを單に「分類型」と「雜纂型」とに統一して論ずること能はず

(イ) 草稿本

(ロ) 淨書本

(ハ) 淨書後の修正本

(二) 後人によつて編輯し直されたる時に第二次の異本生ず。

(イ) ある方針をもつて編輯す。

(ロ) 散亂した原本をなるべく移動せしめず、可能の程度において整理す。

(三) (二)の事情によつて成立したる二種の本を比較して、いづれかに統一せんとする時に第三次の異本生ず。

枕草子の現存諸本は、先づ大體右のやうな事情の交錯によつて成立したものと見て差支ないと思はれる。(一)の事情からは

(イ) 語句、文章の修正。

(ロ) 章段順序の變更。

(ハ) 章段の加除。

等の結果が豫想される。

次に(二)の事情からは

(イ) 分類的組織のものと無組織のものとの別生ず。

(ロ) 本文の誤、脱、衍。

(ハ) 本文不明の箇處に對し、私意による修正加除。

(ニ) 註釋的文句の混入。

(ホ) 後人による増補。

等の結果が豫想される。

次に(三)の事情からは、

(イ) 本文は別系統ながら、組織は全く同一系統の本生ず。——本文を校合せずして組織のみを一方に統一する場合。

場合。

(ロ) 本文は同系統にして、組織は全く異系統の本生ず。——本文は校合して一方に統一するが、組織はこれを

改めない場合。

(ハ) 本文も組織も同一系統に近き本生ず。——本文を校合して一方に改めると同時に組織もまた一方に統一す

る場合。

等の結果が豫想される。

枕草子の異本關係はきはめて複雑であつて、單に轉寫の際の誤りとのみ考へることは出來ない。右(一)(二)(三)の事情の微細な交錯によつて生じたものである。單に冊子の綴ち誤りとか、卷子本の順序の誤脱とか、左様に簡単に片づけられる性質のものではない。元來わが國の古典作品には異本が甚だ多く、源氏物語の如きでさへ「湖月抄本」に對して、全然相異なる系統の本が四五種に止まらず現存する。廣き本文批評的研究の立場から枕草子に對すれば、「流布本」とか、「異本」とか、容易に斷言し得られるものではなく、又その原形に至つては、いよく簡単に決定し得べき問題でないといふことを深く感ずるのである。

右の如き事情であるから、枕草子現存諸本の系統を定めようとする場合、(一)單に形式の類似のみによることは最も危険であり、(二)單に本文の差異のみに着眼することも、同様に完全とは云へない。されば第三の方法として、章段の順序即ち組織と、本文の異同とを合はせ考へつゝ系統立てる方法が、最も妥當であらうと考へられる。この方法は、先づ枕草子の現存諸本を一々綿密に比較し、その異同を精細に吟味しなければならぬ。それがたとひ無駄な努力であつたにしても、いやしくも學問として枕草子の形態を實證的に論ずる前には、それだけの準備がなされなければならぬ。その準備を飛躍して、直ちに形態を論じようとするれば、勢ひ獨斷に流れるのは當然である。

上述の如く、枕草子の現存諸本の系統は、これを單に「分類型」と「雜纂型」との如き外面的な形式に統一して論ずることは、理論上絕對に不可能なことである。「春曙抄」をして「流布本」の名を専らにせしむる事は、少くとも枕草子の形態、就中歴史性を論ずる際に於て絕對につゝしむべきことである。まして「春曙抄」と「安貞二年奥書本」以下の諸本とを同一視して「流布本」と概稱するに至つては、不當も甚しい。

(一) 枕草子現存諸本の系統

枕草子の異本系統は、先づ大體左の四種に分類することが出来る。これは本文校合の結論として云はれ得ることである。

(1) 傳能因法師所持本の系統

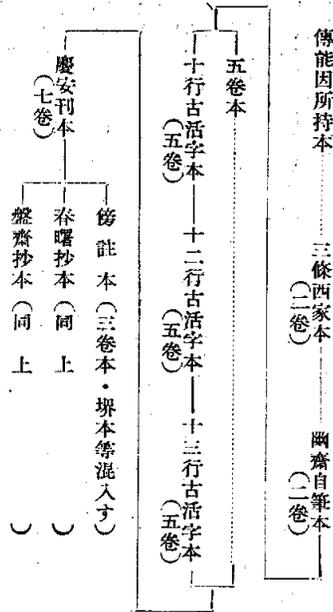
この本はもと二巻で、後に五巻とされた本である。細川幽齋所持の本がこの系統であるが、幽齋自筆本は今細川侯爵家に現存する。この本は奥書によつて知られるやうに、三條西家の本を書寫したものであるが、その原本は今なほ三條西家に現存してゐる。三條西家本は室町中期以前の書寫であつて、近衛公爵家藏十二行古活字本の奥にある「枕

草子は人ごとにもたれども云々の長い跋文をもつてゐる。近衛家本にはこの跋文のあとに「明應五年十月比小女の筆とりて云々」の姉小路濟繼の奥書がある。右の長い跋文は濟繼が書いたのではないかと疑はれてゐたが、三條西家本によつて濟繼以前からあつたものであることが明瞭になつた。

さて三條西家本は、室町時代に流行した本であるらしく、前記の長い跋文といふものによれば、枕草子は相當廣く民間に流行してゐながら善本の少かつたこと、この本は善本ではないが能因所持の本と傳へられてゐるために特に書寫したのであるから他人に見せるなと戒めたこと、又或本に一條の院の一品の宮の本といふものを見たが立派な本であつたと書いてあつたこと等が分る。この三條西家本は細川幽齋に傳はり、同系統の或る本は十行古活字本の親本となり、更に多少の變形を見せて、十二、十三行の古活字本となり、更に慶安刊本（七卷本）となり、岡西惟中の傍註本となつた。これ等は多少の相違はあつても、先づ大體同一系統と見ることが出来る。章段の順序も先づほとんど同様であり、本文の異同もきはめて少い。ただ最も大いなる相違は「經は、文は、佛は、物がたりは、野は」の各項が幽齋本、十行古活字本までにはあるが、その他の諸本には脱落してゐる位である。

春曙抄本は、盤齋抄本と大體一致した章段をもつてゐるが、傳能因所持本の系統の諸本に比すれば、多少の相違がある。例へば「小一條院をば今内裏とぞいふ云々」「川は」等の章段の順序が異つてをり、「成信の中將こそ人の聲は云々」「世の中に猶いと心うき物は」「男こそなほいと有がたく云々」「萬の事よりも情あることは云々」「人のうへいふを腹だつ人云々」「人のかほにとり分きて云々」等の各段は、春曙抄にはあるけれど、他の諸本にはないのである。春曙抄及び盤齋抄は、之を他の諸本に比すれば、かく章段のみならず詞章の上にも、多少の相違を見出すことが出来る。しかし、先づ大體に於て、幽齋本の系統と見てよろしいであらう。その異同ある部分は、安貞二年奥書本その他

によつて校合した結果と見て差支ないと思ふ。これ等の諸本の中、最も原始的な形は三條西家本である。今これ等の諸本の系統を示せば



の如くなるであらうと考へられる。

(□) 安貞二年奥書本の系統

この本は奥に「安貞二年三月 毫及愚翁在判」とある本であつて、文安四年から五年にかけて秀隆の書寫した本と、文明七年教秀の書寫した本との二種があるが、前者は現存せず、教秀自筆本とおぼしき本及び自筆本を以て書寫せし由の奥書ある本及びその系統の本のみが現存する。淺野家藏の枕草子繪卷は南北朝の頃のものなるべしと云はれてゐるが、その繪卷の詞書はこの系統の本によつたものである。恐らく此本は鎌倉時代から南北朝時代にかけて最もよく流行したものであらう。この系統の本は室町時代以後行はれず、従つてその傳本きはめて少く、近世に於ても特に

「古本」として諸家の間に珍重されたのである。この本が傳能因所持本の系統にあらざる別系統の本であるべきことは後に詳説する。

(ハ) 前田家本

前田家本は上述の諸本に對して全く異なる本であつて、もと五冊存したのではないかと想像されるが、現在は四冊あるのみである。この本は藤原爲氏筆とも、民部卿局の筆とも云はれるが、その紙質書風等より推して、少くとも鎌倉中期を下るものではない。この本は形式的には整然たる組織を有し、第一冊が自然現象又は事物につき、第二冊が人間の情意内容につき、第三冊が四季の情趣、感想等につき、第四冊が作者の見聞せし事實について記したものである。この本は前述の如く鎌倉中期の書寫にかゝるものであるが、所々に「本」とか「××本」とか「本やれたり」と本ニアリ」とか「なね本」とか註記してゐる。これ等によつて、前田家本と同系統の本は、恐らく平安朝末期に於て已に成立してゐたといふことが出来よう。そのゆゑは、「本やれたり」と前田家本の原本に書いてあつたのであるから、原本の上に更に今一つの原本が想像せられるし、「なね本」とは「季經本」の草體の如くも考へられ得るからである。それ等の點から、たとひ奥書はなくとも、安貞二年奥書本よりも新しいものであるといふことは云へないと思ふ。

(ニ) 塚本

塚本は元龜元年十一月、宮内卿清原朝臣の奥書ある本で、この二巻の本が、類従本と同系統であることは先づ疑ふ餘地はあるまい。但し類従本は後光嚴院宸翰の由の奥書をもつてゐるが、この傳説には根據はない。類従本は塚本に比して内容が少い。即ち類従本は「きよげなるわらはべの云々」の段で終つてゐるが、塚本は更に「七月つごもりがたに云々」の段につづき、四季の情趣を主にして敘し、人事上のあはれなる事どもに對する感想を記し、最後に衛門

佐のぶかたが御獄に詣でた事をのべて終つてゐる。それ故類従本は塚本の如き本から抄出したか、或は又塚本は類従本に増補したかそのいづれかであらう。

塚本の現存諸本中最も古いものは近世初期の書寫にかゝる高野氏本である。この本はおそらく元龜を去る事違からぬ頃の書寫に係るものであらう。この本は後光嚴院宸翰といふ説がかりに虚傳であつたにしても、決して新しい系統のものではない。何となれば前田家本の「正月一日」の冊の本文の如き、類従本に一致する部分が頗る多く、しかも他に前田家本と全然同一系統の本と云ふ譯に行かない部分も甚だ多いのであるから、この事については後で詳細にのべる。前田家本とはほぼ同じ時代に於て對立的に存在した一本と見て差支ない。但し塚本には、著しい後人の補筆が認められるのであつて、現存の形を以つて直ちに古い形のまゝであると斷言し難い事は勿論である。

以上述べたやうに、枕草子の現存諸本は大體四つの系統に大別する事が出来る。即ち、

イ、傳能因所持本の系統

ロ、安貞二年奥書本の系統

ハ、前田家本の系統

ニ、塚本の系統

の四種となるのである。

右の中、(イ)と(ロ)とは、單に外面的な編纂形式の上から見ると雜纂的であると云ふ點に於て一致し、(ハ)と(ニ)とは同じく分類的であるといふ點に於て一致する。しかし大まかな編纂形式の類似といふ事は、決して本文系統の一致といふことを意味しない。(イ)(ロ)兩系統の本に對して、(ハ)(ニ)兩系統の本が、全く別種の系統である事は、

従來の多くの學者の一致した意見であるから、今は（イ）と（ロ）と、それから（ハ）と（ニ）とが、それぞれ同系統であるまじき理由を述べて見ようと思ふ。

（二）傳能因所持本と安貞二年奥書本とは同系統にあらず。

大まかな見方よりすれば、等しく分類的形式を具へてゐるといふ事實は、兩書の系統の一致せる事を示すかの如く思はれるが、精細に章段の數、順序及び本文の異同を比較すれば、たうてい同一系統と解する事の出來ないものを見出すのである。

（イ）安貞二年奥書本に見え、傳能因所持本に見えざる章段（但し春暎抄に見ゆるものは他の語本に見えずとも今これをあけず）

○たちは

○しきにおはします頃八月十日の月あかき夜右近の内侍に云々

○ほうしはことすくななる云々

○女はおほどかなる云々

○女のおそびは

○いみじうあつきひる中にいかなるわざをせむと云々

○かしこきものはめのとのをととこそあれみかどみこたちなど云々

○南ならずばひんがしのひさしのたいのかけ見ゆるばかりなるに云々

○おほぢちかなる所にてきけば車にのりたる人のありあけのをかしきに云々

○ふと心おとりする物は男も女もことばの文字いやしうつかひたる云々

○又しうもおはしまし女房などさぶらふにうへ人内侍のすけなど云々

二 此草子の系統はこれを單に「分類型」と「雜纂型」とに統一して論ずること能はず

- 内のつぼねなどにうちとくまじき人のあればこなたの火はけちたるに
- 五月のなが雨のころうへのみつぼねのことにただのぶの中將のよりみ給へりし云々
- ことにきら／＼しからぬをのこの高きみじかきあまたつれだちたる云々
- 品は
- 五月こそ世にしらずなまめかしきものなりけり云々
- 九月廿日あまりの程はせにまうでていとほかなき家にとまりたりしに云々
- こだいの人のさしぬききたることいとたいだいしけれ云々
- 左右の衛門のぞうをほう官といふ名つけていみじうおそろしう云々

以上の章段は安貞二年奥書本には見えながら、春曙抄はじめその系統の諸本に見えないものである。ところが春曙抄はじめその系統の諸本には見えながら、安貞二年奥書本に見えないものがある。即ち

- 人の家のまへをわたるにさぶらひめきたる男云々 (前田家本にもあり)
- いとほしげなきもの (前田家本にもあり)
- きたなげなるもの (前田家本にもあり)
- 覗きたなげに塵ばみ云々 (前田家本にもあり)
- めづらしといふべき事にはあらねど文こそ云々 (前田家本にもあり)
- わるきものは (前田家本にもあり)
- 夏うすもの (三條西家本夏のはぎはの項を立つ) かたつ方のゆだけ着たる人こそ云々 (前田家本にもあり)
- 心づきなきもの (前田家本にもあれど相互に錯簡多し)

○そくたいは（前田家本にもあり）

●しなこそ男も女もあらまほしきことなめり云々（前田家本には見えず）

○たくみの物くふこそ云々（前田家本にもあり）

●物がたりもせよ、昔物がたりもせよ云々（前田家には見えず）

●清げなるわかき人の直衣も袍も云々（前田家本には見えず）

以上は春曙抄及びその系統、即ち傳能因所持本に見えながら、安貞二年奥書本に見えないか、又は小さく分れて他の章段中に混入するかしてゐるものである。●點以外のものは前田家本には存するのであるから、この點よりすれば傳能因所持本はむしろ前田家本に近づくのである。

（□）安貞奥書本と春曙抄系統本との章段の内容中には、同系統と目する事能はざる錯簡及び本文の相違あり。

安貞二年奥書本を、春曙抄系統本に對して、嚴密に比較して見ると、各章段の内容中に、非常に大きな錯簡が相互に見出される。もし同一系統の本であるとすれば、かゝる錯簡の生ずる理由はどこにあるであらうか。尤も春曙抄と三條西家本との間にも多少の錯簡がないこともなく、例へば「鳥は」の章段の如きは、春曙本は寧ろ安貞二年奥書本に近く、三條西家本は前田家にいたく接近し、塚本は是等に比して別箇の本文を有する。これはおそらく春曙抄又は盤齋抄の原本が、安貞二年奥書本などによつて校合されてゐたからではないかと想像される。とにかくこれ等はきめてわづかであるから、校合の結果であるとも考へられるが、安貞二年奥書本と春曙抄との錯簡に至つては、たうてい左様に簡単に解決することは出来ない。その主なる章段を示せば次のやうである。

○にくきものは

○ふみことばなめき人こそ云々

○びらうげはのどやかにやりたる云々

○にげなき物

二一 枕草子の系統はこれを單に「分類型」と「雜纂型」とに統一して論ずること能はず

- わかき人とちごどもは云々 ○草は ○草の花は ○めでたきものは ○なまめかしき物 ○ねたきもの
 ○かたはらいたきもの ○むとくなるもの ○えせものの所するをり ○したりがほなるもの ○ものへいく
 道に

右の各段中、安貞二年奥書本には春曙抄と全然相容れない本文が交つてゐる。例へば「草は」「草の花は」の段の後半の如きは、堺本とほぼ同様な本文を有し、前田家本とも、傳能因所持本系統の諸本とも全く異なるのである。又興味ある事は、安貞二年奥書本「めでたきもの」の條には、前田家本とほぼ同様の本文があり、春曙抄系統の本にある本文の幾分を脱してゐる。しかるに前田家本には、それ等の逸文及び類従本の如き全然別箇の本文さへも後にまとめやうな傾向がある。又「ねたき物」の條で、安貞二年奥書本では「見すまじき人にほかへ遣りたる文とりたがへてもて行きたる」といふ一文を「あさましきもの」の段に入れてゐる。又「すすろなる事腹だちて同じ所にも寝す云々」の一節を「むとくなるもの」の段に入れてゐる。前田家本はきはめて異同多き本文を有するけれど、この二點に於ては春曙抄系統に類し、堺本は大體に於て全然異なる本文を有してはゐるが、「すすろなる云々」の段の位置に於ては不思議にも安貞二年奥書本に類するのである。

なほ本文の字句の異同に關しては、たうていこゝに擧げられるものではないから、代表的に「原は」と「たとしへなきものは」との二段をあげて参考に供しよう。

春曙抄 原は たかはら。みかのはら。あしたのはら。そのはら。はぎはら。あはづのはら。なしはら。うなるごがはら。あべのはら。しのはら。(三條西家本をはじめとして前にかゝげたる同系統の諸本みな同じ)

安貞二年奥書本 原は みかのはら。あしたのはら。そのはら。(本文は前田家五卷本による)

前田家本 はらは たかはら。みかのはら。あしたのはら。そのはら。はぎはら。あはづのはら。なしはら。うなるごがはら。
しのはら。こひの松ばら。みかきのはら。こひはら。

堀本 はらは なしはら。みかのはら。あたのはら。そのはら。うなるごがはら。しのはら。はぎはら。こひはら。

の如き有様であつて、前田家本は堀本に似るよりも、むしろ春曙抄に似てゐて、一層集成的な性質をもつてゐることが明かであらう。次に

春曙抄 たとしへなき物 夏と冬と。よるとひると。雨ふると目てると。わかきとおいたると。人の笑ふとはらだつと。くろきとしろきと。思ふとにくむと。あるときはだと。雨ときりと。おなじ人ながらも心ざしうせぬるは、まことにあらぬ人とぞおぼゆるかし。ときは木おほかる所からすのねて、夜中ばかりに、いねさわがしくおちまどひ、木づたひて、ねおびれたるこゑになきたるこそ、ひるのめにはたがひてをかしけれ。

安貞二年奥書本 たとしへなきもの 夏と冬と。夜とひると。雨ふる日と目てる日と。人のわらふとはらだつと。おいたるとわかきと。しろきとくろきと。思ふ人とにくむ人と。おなじ人ながら心ざしあるをりとかはりたるをりはまことにこと人とぞおぼゆる。火と水と。こえたる人やせたる人。かみながき人とみじかき人と。よがらすどものゐて、夜中ばかりに、いねさわぐおちまろび木づたひて、ねおきたるこそ、ひるのめにたがひてをかしけれ。

前田家本 たとしへなき物 夏と冬と。夜とひると。あめふるとひてると。人のわらふとはらだつと。わかきとおいたると。くろきとしろきと。思ふとにくむと。あむときはだと。おなじ人ながらも心ざしあるとうせぬるはまことにこと人とこそみゆれ。堀本 たとしへなき物 夏と冬と。夜と晝と。かきくらし雨ふる日といみじうてりたる日と。人のわらふとはらだつと。おいたるとわかきと。しろきとくろきと。思ふ人とにくむ人と。おなじ人ながらも心ざしあるをりとかはりたるをりとはまことにこと人とこそおぼゆれ。火と水と。こえたるとやせたと。かみのながきとみじかきと。

二 枕草子の系統はこれを單に「分類型」と「雜纂型」とに統一して論ずること能はず 二一

右によつても分るやうに此處の本文より云へば、安貞二年奥書本は堺本と先づ同系統と見てよろしいが、春曙抄系統とは別系統と見るべきである。しかるに安貞二年奥書本には、春曙抄系統本と同様に、

よがらすどものゐて、夜中ばかりに、いねさわぐ。おちまろび木づたひて、ねおきたるこゑに鳴きたるこそ、ひるのめにたがひてをかしけれ

の一段が加はつてゐる。しかるに前田家本にはこの一段は全く別な所に別な段として出てゐるのであつて、その本文は、安貞二年奥書本に似ずしてかへつて春曙抄系統本に似てゐる。即ち、

ときは木どもおほかる所からすどものねて夜中ばかりにいねさわがしくおちまろびこづたひてねおびれたるこゑになきたるこそひるのめにはたがひてをかしけれ

とある。しかるに堺本にはこの段がやはり別な所に全く別段として立ててあるが、その本文は前田家本とも安貞二年奥書本とも類似しないのである。即ち

ときは木どもおほかる所に烏どものねて夜なかばかりにいねさわがしうおちまろびこづたひてねおびれたるこゑに鳴きたるこそをかしけれ

とある。以上の關係から見て、少くとも安貞二年奥書本は、春曙抄系統本と同一な本文系統にあらざることは明白である。この「ときは木云々」の段は、「たとしへなき物」の項に入れるべきものであるか、又は全然別段に立つべきものであるか。自分は別段に立つべきものであると確信する。そこに我々は何等の聯想の必然性をも見出すことは出来ない。もし強いて聯想を求めようとするなら、我々はこの種の考證に於て最も危険である所の印象批評的方法を是認しなければならなくなる。印象批評は一切の解釋を神祕的なドグマの中におしこめることによつて、眞に文藝的な

解釋であるとなす場合が甚だ多いと思ふ。

(ハ) 安貞二年奥書本と春曙抄系統本との間にはたうてい同一系統と見る能はざる章段の順序の相違あり。

右二種の系統の本を相互に比較して見ると、各章段の順序は著しく異なる。その相違は二十や三十ではない。あまりに甚しい相違であるが故に、たうていこゝに列擧することは出来ない。安貞本は已に活字本も一般に流布してゐて、兩者の目録を比較しただけでも、一見すぐ分ることであるから、本稿にはその相違の章段をあげる煩雜を避けたいと思ふ。

右にのべ來つた如く、章段の有無・順序・本文の異同等より考へて、安貞二年奥書本は斷じて春曙抄系統即ち傳能因所持本系統であつてはならない事が明白になつたと思ふ。

(三) 前田家本と堺本とは同一系統にあらず。

前田家本と堺本及び類従本とは、分類的形式を有する所から——ただその點から同一系統であるかの如く誤解されやすい。今かゝる見解のいはれなきことを少しく説明して見たいと思ふ。

章段の數は堺本の方がはるかに少い。例へば

- | | | | | | | | |
|--------|----------------|------------|--------------|-------------|----------|--------|---|
| ○ほしは | ○さきは | ○やは | ○やしろは | ○行幸にならぶものは | ○歌は | ○歌のだいは | ○ |
| あそびわざは | ○夏のうはぎは | ○あふぎのほねは | ○かみのいろは | ○ひあふぎは | ○今上の一の宮云 | | |
| 云 | ○御まへのりんじのまつり云々 | ○いとほしげなきもの | ○ことに人に知られぬもの | ○ただすぎにすぐ | | | |
| るもの | ○みならひするもの | ○ことごとなるもの | ○せめておそろしきもの | ○いみじくきたなきもの | | | |

等は前田家本「春はあけぼの」の巻、「めでたきもの」の巻の章段であつて、しかも堺本に見えないものである。こ

二 枕草子の系統はこれを單に「分類型」と「雜纂型」とに統一して論ずること能はず

の兩冊は章段もその種類も堺本のそれに類似してゐながら、しかもなほ右の如き相違を有するのである、まして「正月一日」の巻と「小白河の巻」とには約六十段の章段が堺本に缺けてゐるのである。

次にそれ等の章段は、分類形式をもつて配列されてゐると云ふものの、決して同一であるとは云ふ譯に行かない。前田家本「春はあけぼの」の巻、「めでたき物」の巻は、各段に取扱はれた事項の性質上、ほぼ同様な順序をもつてゐる。しかるに「正月一日」の巻以下になると、部分的には類似の章段の並ぶことがあり得るけれど、全體としては互に前後錯亂をきはめ、その一々はたうてい列擧の煩に堪へないのである。

次に詞章の異同を調べて見るに、前田家本と堺本とは、やゝ近似した本文をもつてゐる。ことに春曙抄系統本に見えない章段で、わづかに安貞二年奥書本及び堺本の一部に出てゐるものを比較すると、兩者がきはめて近い本文を有する事が分る。しかし、それ等は部分的に云はれ得ることであつて、全體としては決して同一系統の本文といふことが出来ない。今その例として二三列擧して見よう。

春曙抄 おぼつかなき物 十二年の山ごもりのほうしめおや。しらぬ所に行きたるにあらはにもぞあるとて、火もともさできすがになみわたる。いま出できたるもの心も知らぬに、やむごとなき物もたせて、人のがりやりたるに、おそくかへる。ものいはぬちごの、そりくつがへりて、人にもいだかれずなきたる。くらきにいちごくひたる。人のかほ見しらぬもの見。(安貞二年本は「くらきにいちごくひたる。人のかほ見しらぬもの見」の一節なし。他は大體春曙抄に一致す)

前田家本 おぼつかなき物 十二年の山ごもりの女おや。しらぬ所に行きたるにあらはにもぞあるとて火もともさできすがになみわたる。いまいできたるもの心も知らぬに、やむごとなき物もたせて人のがりやりたるに、おそくくる。くらきにいちごくひたる。人のかほしらぬのみ。ものいはぬちごのそりくつがへりて、人にもいだかれずなきたる。

堺本 おぼつかなき物 十二年の山ごもりしたるほうしのめおや。やみなる夜はじめてしらぬ所きたる、あないもしらねば、いとつゝましくて、ひもえともさぬ、さすがに人はあまたみなみたるこそおぼつかなけれ。またまいてきたるげすなどの心もしらぬに、やむごとなきものなどもたせて人のがりやりたる、おそくかへるほど。物いはぬほどのちごの俄におどろおどろしうなきて、これいだくにも、かれいだくにも、いだかれず、そりかへりてなきたるこそ、いかなることのあるにかとわりなくおぼつかなけれ。くらきところにいちごくひたる。(類従本と語句の少異あり。今無窮會本による)

右の本文の比較によつて、前田家本は最も安貞二年奥書本の系統に近く、堺本は全然別種のものであることが明瞭であらう。前田家本が、かくの如く安貞二年奥書本の本文とほとんど同一であるか又は類似してゐるかの例は非常に多い。然るに前田家本は安貞二年奥書本そのものではなく、一方堺本にも類した部分の少くない事は前にのべた。所が前田家本は他の諸本のいづれにも一致せず全く獨特な本文も少からず持つてゐる。例へば

春曙抄 佛は 如意りは人の心をおぼしわづらひてつらづゑをつきておはする、世にしらずあはれにはづかし。千手、すべて六

観音。不動尊。薬師佛。しやかみろく。普賢。地藏。文殊。

安貞二年奥書本 佛は 如意輪。千手、すべて六観音。薬師佛。釋迦佛。彌勒。地藏。文殊。不動尊。普賢。

前田家本 佛は 如いりん人をわたしかね給ひてつらづゑつきてなげき給ふがいとかたじけなくあはれなるなり。千手観音、すべて六観音。やくしぼとけ。彌勒。がうさんぜはみめはおそろしげにおはすれど、御ちかひのたのもしたてたるもいとつきづきしかめり。釋迦佛。ふどう。もんじゆ。地藏井。

堺本 佛は やくし。によいりの人をわたしわづらひてつらづゑつきてなげき給へるとあはれにかたじけなし。地ざう。がうさむぜはみめこそおそろしげにおはすれど、御ちかひいと哀にたのもし。だらにもいとつきづきしかめり。

右の例でも分るやうに、前田家本は、安貞本にも似てをり、春曙抄系統本にも似てをり、堺本にも似てをるが、し

二 枕草子の系統はこれを單に「分類型」と「雜纂型」とに統一して論ずること能はず

かもそれ等のいづれでもなく、中には自身獨特の本文をも有する全く別種の本であることが分るのである。

以上考へたことによつて、我々は次のやうな結論に到着した。即ち

(イ) 枕草子の現存諸本の系統は四種、即ち、傳能因所持本、安貞二年奥書本、前田家本、堺本に大別することを得べし。

(ロ) これ等の諸本には相互に本文の混入錯亂せるを認め得るをもつて、傳能因所持本の生ぜし時代、少くとも平安朝末期にはこれ等の本文はいづれも存在せしものと想像せらる。

(ハ) これ等の諸本には後人の異本校合による修正、私意による増補等のことあるべし。

右の事實によれば、平安朝末期の頃には枕草子の異本が對立し、絶対に信賴せられ得る證本がなかつたと云ふことが想像される。安貞二年本の奥書に「依無證本不散不審」といひ、三條西家本の跋に「枕草子は人ことに持たれどもまことによき本は世にありがたきもの也。これもさまざまではなけれど能因が本ときけば、むげにはあらじと思ひて書きうつしてさぶらふぞ。草子からも手からもわるけれどこれはいたく人などにかさでおかれさぶらふべし。なべておほかる中になのめなれど猶この本もいと心よくもおぼえさぶらはす。さきの一條院の一品の宮の本とて見しこそめでたかりしかと本に見えたり云々」とある事實が、異本研究の結果裏書されるのである。

しからば次の問題は、これ等の諸本の中、いづれが著者の原本(草稿本、淨書本その他を含む)の形を示すかといふ問題である。

三 枕草子の現存諸本はいづれも後人の改修本なり。

本文批評的研究の結論によれば、枕草子の現存諸本は一として原形を示すものであるとは云はれない。かくの如き種々雑多の異本の生ずる事實それ自身が、むしろ權威ある證本がその當時存在してゐなかつた事實を立證してゐるではなからうか。證本が無かつたならばこそ、思ひ思ひの改修、改纂がなされ得たのである。平安朝末期に於て已にかくの如き状態であつたから、枕草子の原形はいち早く散佚し、ばらばらになつて傳はつたものが、多人數の手によつてまとめられ、安貞二年奥書本に「一本に」「又一本に」と追記して増補した如き事も行はれ、或は類纂又は隨筆の性質上、後人の私意による追加、又は補入等の事も行はれ、かつ又、和歌の打聞、逸話の如きものは、たとひ清少納言の作ならずとも、その形式の類似の故をもつて、特にこの草子に追加されるやうな事情もあり得たであらう。しかしこれ等は主觀的な想像にすぎない。こゝには現存諸本が決して原形にあり得ざることを事實に徴して考へて見よう。

(一) 春曙抄系統本(傳能因所持本系統)は原形にあらず。

春曙抄系の諸本、即ち傳能因所持本の系統の諸本には明かな章段の錯簡がある。例へば「心づきなきもの」の如きは、二ヶ所に章段を異にして出てゐるが、そのはじめの部分の前半は「にくきもの」の條下にも混入しをり、その下半は、後の部分の文中に再出してゐる。安貞二年奥書本では「いみじう心づきなきもの」となつてゐて、決して左様な錯簡は持たない。又「びらうげはのどやかにやりたる云々」の章段の「牛はひたひとちひさく云々」の一文は、安貞二年奥書本、前田家本、堺本等に於けるが如く別の章段として各々獨立すべきものでありながら、こゝにまとめてあるのは不自然である。又「にくきもの」の段の中に「曉にかへる人の云々」の長い一文が混入してゐるが、これは、安貞二年奥書本その他には別な章段として立ててあるやうに、この段の中に含まれてゐてはならないものである。(但し例の印象批評は、この連絡ないものに強ひて連絡を與へ、その論理のおぼつかなさや却つて藝術的であるといふか

も知れない。) 三條西家本に「はるかなるもの」の次に一度前に出た「物のあはれ知せがほなる物」の段が再び混入してをり、しかもその本文は前出の本文とは異り、かへつて前田家本とほぼ等しく「はなたりまもなくかみつゝのいひたることを。まゆぬくをりのまみ」とある。(因みに諸本に「まゆぬく」とのみあるのは意義不通であるが、これによく分る。) 春曙抄にはこの部分を削除してゐるが、三條西家本のこの部分は異本の校合の結果混入したのか、整理の際混入せしめたか不明である。又「びらうげはのどやかに云々」の段なる「うしかひはおほきにて云々」の一文は、三條西家本に於ては「能本のいとすくなくみえたる」といふ別な段を設けて、その段にをさめてゐる。この能本とは能因に關係があるか否か不明であるが、「の」の前に數文字闕脱してゐることは確かである。これ等よりして三條西家本の原本は文字が見えないほど損傷したものであつたと想像してもよいかと思ふ。又「草は」の段と「草の花は」の段とに見るやうな本文の錯簡は他にも非常に多いのであるから、三條西家本ならびにその系統の諸本をもつて枕草子の原形となすことは絶対に不當な見解であると云はなければならぬ。

(二) 安貞二年奥書本は原形にあらず。

安貞二年奥書本には「もりは」の項が重複して二度出てゐる。即ち先づ

もりは うへきのもり。いはだのもり。木がらしの森。うたゝねのもり。いはせのもり。おほあらしの森。たれそのもり。く
の安貞二年本による。宮内省圖書寮藏の同本には「戀の森」以下なし。(以上前田家藏

と出で、後に再び

もりは うへきのもり。いはだのもり。木がらしの森。うたゝねのもり。いはせのもり。おほあらしの森。たれそのもり。く
るべきの森。たちぎきのもり。よこたてのもりといふがみゝとまるこそあやしけれ。もりなどいふべくもあらず。ただ一木あ

るをなに事につけたらん。

・と出てゐる。右二種の文は二種とも春曙抄系統の諸本に比すれば全然別系統であるが、前者は塚本にほぼ類似し、後者はどちらかと云へば春曙抄又は前田家本に近い。清少納言の手になる枕草子の原本に、かく二つの段が別々に存してゐようとは考へられない。又春曙抄系統本には「ねたき物」の段に「見すまじき人にほかへやりたる文とりたがへてもて行きたる——」の一節があるが、安貞二年奥書本には、これが「あさましきもの」の段の一部として混入してゐる。前田家本はほぼ春曙抄系統本に類してゐるのであつて、主観的な判断ではあるけれども、右の文にあらはれた事實の如きは「ねたきもの」の概念の中に納めらるべきものと思ふ。又同じ段に、春曙抄系統本及び前田家本には「すすろなる事腹だちておなじ所にもねす云々」の一文があるが、安貞二年奥書本に於てはこれが「むとくなる物」の段に納めてあり、文章もかなり異つてゐる。しかしこの文の事實の如きも主観的な判断ではあるけれども「ねたきもの」の中に入れなければならぬものと思ふ。かくの如き編纂上の誤りは安貞二年奥書本に甚だ少くないのであるから、これ等を許容し辯護して、他の諸本を否定することは、不穩當なことと考へられる。かくして安貞二年奥書本も結局原形そのものではないと断定し得られるのである。

(三) 前田家本は原形にあらず。

前田家本は他の諸本に比して類例まれなる整然とした組織をもつてゐる。しかしこれとて原形にあらずして、後人のまとめたものであることは、同じ記事が場所をかへて二度重複して出てゐることによつて推察することが出来る。即ち「正月一日」の卷に

かほはさる事にてしなこそをとこも女もあらまほしき事なめれ。いへの君にてあるにもたれかはよしあしをさだむる。それだ

にものみしりたるつかへ人いきておのづからいふべかめり。ましてまじるひする人はいとこよなし。ねこのつちにおちたるやうにてをかし。

とあるのが、一丁へだてて、

かほはさる物にて人はしなこそをとこも女もあらまほしけれ。我ひとりいへの君にてある時はたれかはよしあしだめん。それだにほどほどにしたがひては人どもいできてはおのがどちほめそしりもいふべかめり。ましてまじらひする人はききずなくいはれむこといとかたし。

とある。右の中前者は春曙抄系統本の本文であり、後者は塚本の本文である。又同じく「正月一日」の巻に

ほそ殿に人々あまたゐるものなどいふほどに、きたなげなきをとことねりわらはなどのきよげなるふくろつゝみにいろ／＼のきぬどもをひきつゝみて、さしぬきのくよりなどほのみえたる。またふくろいれたるこゆみやたてほそたちなどもてありくを、それが御ぞととふに、ついゐてなにがしどののとうちいらへどいくはよし。けしきばみやさしがりてしらずともいひまたききもいれでいぬるはにくし。

とあるが、「めでたき物」の巻に、

ほそ殿に人々あまたゐて、ありく物どもめやすからずよびよせて、ものなどいふにきよげなるをのこ小舎人わらはなどのよきつゝみふくろにきぬどもつゝみて、さしぬきのこしなどうちみえたる。ふくろに、ゆみやたてほそたちなどもてありくを、たが御ぞといふに、ついゐてなにがし殿のといひてゆくものはよし。けしきばみやさしがりて、しらずともいひ、きよもいれでいぬる物はいみじうぞにくきかし。

とある。右の中前者は塚本に近く、後者は春曙抄系統本に近い。清少納言の原本に、草稿本と清書本とがあり、それ等に各々字句の異同あるべき事は推定されるが、しかしかく同時に場所を異にして同一の意味の文が書かれようとは

思はれない。後人の整理する際、異本を参考してかく誤り編纂したものと解するのが最も自然であり、従つて前田家本も結局原形でないと言はねばならぬ。又前田家本が平安朝末期に於て已に成立してゐたと考ふべき理由が存する以上、春曙抄系統本、堺本等の本文も、平安朝末期に於て世に行はれてゐたといふ事が、右の事實によつて證明せられると思ふ。

(四) 堺本は原形にあらず。

本文の系統より云へば、堺本が最も後人の手を經てゐるやうである。この本には章段の中に他本との異同が甚だ多く、文章も全然別系統な獨特なものを持つてゐて、これを清少納言の自筆本のまゝの形とすることは常識としても出来ないことである。例へば、

女は おほどかなる。したの心はともかくもあれ、うはへはこめかしきはまづらうたげにこそ見ゆれ。いみじきそらごとを人にいひつけられなどしたれど、みちみちしくあらがひわきまへなどはせで、ただうちなきなどしてゐたれば、見る人もおのづから心ぐるしうてことわりつかし。

女のおそびは ふるめかしけれどもらんど。けふせき。すぐろくはしらき。へむつぐもよし。(不明の部分あれと原本のまゝ)
をとこのおそびは こゆみ。さまあしきやうなれども、まりもみ所あり。おんふたぎ。すぐろくはてうばみ。

とつづけて、「まひは」の段にうつつてゐる。「女のおそびは」といふのは、「女は」からの聯想である。聯想は知らず識らずの中に、論理的な體系から離れ易い。この事は「古今六帖」の體系によつても分るのであるが、この場合は他の諸本の組織と全く一致しないのであるから、印象批評的な辯解をしないかぎり、我々はかゝる組織をもつて、枕草子の原形となすことは出来ない。

さて、上述の如く現存四大系統の諸本は、いづれも枕草子の原形（草稿本、清書本を論ぜず）であり得ないことが明白になつた。そして平安朝末期に於て、已にかゝる形態の諸本が成立してゐたといふ事は、枕草子の原形が如何に早くから散佚してゐたかといふことを、立證するのである。

しからば次に問題となることは、散亂したる原本の各葉は、如何なる方法によつて整理されたであらうか。これには三つの場合が考へられ得る。即ち

一、散亂せる形に手をふれず、そのままに綴ぢ合はせる場合。

二、明かな部分だけを整理し、不明の部分は散亂の形のまゝに残す場合。

三、原本の形はかくあるべしと推定し、自己の識見によつて新しく組織立てる場合。
右の三つの場合が想像される。

かくして一先づ整理された本は、不明な部分をのこしたまゝで新に書寫されて、全く混亂を來し、更に不明な部分の改修、全體に互る増補、訂正、追加等の事が、或は新資料の發見により、或は異本との校合により、或は他の根據によつてなされ得たと想像される。これ等の事情は前田家本の組織の中にも明瞭に看取することが出来る。即ち「めでたきもの」の卷の卷末に存する「せめておそろしき物」以下六段の如きは、分類の整理が一旦終つた後に、卷末に増補されたものであると解せられる。

さて一度び散亂したる枕草子の原本は、右の如く三つの方法に於て整理されたとするならば、(一)(二)の方法よりして、傳能因所持本及び安貞二年奥書本等が生れ、(三)の方法よりして、前田家本、堺本等が生れたと推定するのは不自然ではない。しからば次に右諸本の中いづれが最も原本に近く整理されたかといふ重要な疑問を解決するがた

めに、現存諸本に對して如何なる方法による考證又は批判が試みられるべきであるかの問題が生ずるのである。

四 原形推定に於ける印象批評を排す。

現存諸本の形態を通じて、その原形を推定せんとする時、少くとも次の二つの方法が可能である。

(一) 印象批評によるもの。

(二) 實證的なる根據に立たうとするもの。

前者は、現存諸本——後人改修の跡歴然たる現存諸本の中一本をえらび、これが組織を原本のまゝのものとして考へ、その章段の關係に對して、印象批評的・主觀的解釋を下すものである。例へば、

大夫は 式部大夫。左衛門大夫。史大夫。六位藏人おもひかくべき事にもあらず。かうぶりえてなにのたいふ、權の守などいふ人の板屋せばき家もたりて、またこひ垣などあたらしくし、車やどりにくるま引きたて前近く木おほくして、牛つながせて、草などかはすこそいとにくけれ。庭いときよげにて紫がはして、いよすかけわたして、ぬのさうじはりて住ひたる。よるは門つよくさせなど事おこなひたる、いみじうおひさきなく心づきなし。おやの家、しうとはさらなり、をぢあになどのすまぬいへ、そのさるべき人なからんは、おのづからむつまじううちりたる受領、又國へ行きていたづらなる、さらずば女院宮ばらなどの屋あまたあるに、つかさまち出でて後、いつしかとよき所尋ね出でて住みたるこそよけれ。

女のひとりすむ家などは、ただいたうあれで、ついぢなどもまたからず、池などのある所は、みくさゐ、庭などもいとよもぎしげりなどこそせねども、所やすなごの中より、あをき草見えさびしげなるこそ哀なれ。物かしこげに、なだらかにすりして、門いたうかため、きはぎはしきは、いとうたてこそおほゆれ。(本文春曙抄による。傳能因所持本の系統の諸本みなかくの如し)

のを正しいと是認しようとする所に、印象批評的方法の自由さがあると同時に、また獨斷の存することも考へねばならないと思ふ。

枕草子の形態に關する問題は、事實の問題である。思想の問題ではない。事實の問題は事實、そのもので解決しなければならぬ。如何やうにも解釋の出来るやうな空々漢々たる印象批評によつて、單に藝術品としてはかゝる様式が面白いからといふやうな見地のもとに、最も客観的であるべき形態の問題をにはかに論定するが如き態度に對しては、我々は絶対に贊同することは出来ない。たとひ偶然に結論の一致するやうなことがあつても、それはあくまでも偶然の一致であつて、本質的な一致ではない。我々はかくの如き過程そのものを絶対に是認し得ないのである。

次に實證的な根據に立つて、枕草子の原形を明かにしようとする態度は、多くの學者によつて屢々試みられた。或る人は、嚴密な本文の比較の上から、又或る人は散亂せる卷子本又は冊子の再修に於ける事情の上から、或る人は作者の傳記的研究の上から、種々の説を立ててゐる。しかしそれ等の説も、結局枕草子諸本の事實に對する認識が不十分であつて、きはめて局部的な問題を一般化しようとするために、印象批評的方法と同様な獨斷を冒すのである。即ち一として原形にあらざる、現存諸本の中のいづれかを原形と假設して議論を進め、枕草子の原形を或は「雜纂型」であるとか、或は「分類型」であるとか斷定し去るのである。

自分は自分一箇の私案としては、「雜纂型」よりもむしろ「分類型」を枕草子の原形と考へるのが自然であらうと思ふ。但し自分の考へてゐる「分類型」といふものは、決して塚本そのものでもなく、又前田家本そのものでもない。前田家本の「春は曙」の卷「めでたき物」の卷の兩冊、即ち自然及び人生に關する事物及び情趣の類聚に關する部分は、少くとも「分類型」——但しその様式は前田家本、塚本と同一でないのが自然である——をもつてゐたと考へ、

その所見をかつて國語と國文學七十八號に發表したことがある。かく推定する主なる理由は、

一、跋文を信するならば枕草子の一部分は已に作者の宮仕中に成立してゐなければならないのに、春曙抄系統本には、長保二年八月頃の記事があるから、中宮崩御以後の成立と考へなければならなくなる。よつて分類型の部分は作者宮仕中に出来、隨筆の部分はそれ以後に成立したと考へたい。

二、類聚の部分に見えるやうな豊富な内容を、ある組織的な聯想の形式によらず、ただ漫然と集める事は、心理上不自然と思はれる。

三、平安朝中期には已に辭書としても、和歌の節用めいた類纂としても、立派な分類法が行はれてゐたから、それによるのは當然である。

四、枕草子中、古今六帖の歌を引くことが甚だ多い。されば分類法に於ても、これが感化を受けたと考へるのは不自然ではない。

五、倭名類聚抄又は古今六帖の分類と、枕草子のそれとを比較すれば、實際に於て密接な關係が見出される。

六、たとひ後世の抄出本にしても堺本や類従本の分類組織には前田家本と同様な性質が認められる上に、前田家本と同一系統の本は平安朝末期に已に成立してゐるから、その頃何等かの根據があつてかくの如き組織を採用したと考へられる。

七、清少納言は藝術家といふよりも、むしろ學者である。類聚の部分は實用的、學問的要求のもとに執筆されたと考へたい。

以上のやうな理由から、自分は枕草子の原形は、分類様式——少くとも自然物、人事上の情趣に於ける部分に於て

は——をもつてゐたであらうと推定した。しかしこれ等も結局印象批評的方法と同様に、その根據の薄弱なる點を十分指摘せらるべきである。よつて、今は全く別な方面から一つの新しい方法を試みに提案して見たいと思ふ。

五 枕草子の原形は果して「雜纂型」なるか。

枕草子に於て最も問題になるのは、「山は」「川は」といふやうな自然物又は自然現象に關する物と、「うつくしきもの」「にくきもの」等の人間の精神内容に關するものとの二つの部分が、清少納言の原本に於て、果して春曙抄系統本や安貞二年奥書本のやうに、他の隨筆、日記の部分と交錯して、雜然と輯めてあつたか、又は獨立した類聚の形をもつて別にあつてあつたかといふ所に在ると思ふ。

枕草子の現存諸本が、悉く後世の改修本であることは前項にのべた。又その改修の際三つの方法のあるべきことも既にのべた。もし、改修する際、私意を加へず、原本の散亂のままに保存しておいたとすれば、その形の中に、原本の姿の一部分が残存してゐると考へることは不當でない。今新しく提案して見たいと思ふのは、この點に關することである。

原本が假に一葉づつばらばらに散亂したとする。しかしその一葉の中に書かれた記事は、それ以上には少くとも散亂することはあり得ない。即ちたとひ原本の各丁が、如何やうに散亂するとも、少くとも一葉内に認められた範圍に於ては、原本の形の散亂しやうがない。それ故前田家本や、堺本の如き改修者の私見の加はらない、散亂の形のままを止めようとしたかに見える傳能因所持本・安貞二年奥書本の如き本には、原本の一葉にあらはれてゐた舊き形式が残存し得ると考へても敢て不當ではないと思ふ。

もし右の推定に誤がないなら、原本各葉に止められた記事といふものは

一、冊子又は卷子の紙一葉の表又は裏各一面にをさめられる範圍の長さであることを要する。

二、胡蝶装の綴ち方に於て、表から裏につづく場合は、二面にをさめられる長さであつてもよい。

三、散亂した後、文章のつづきの明白に分つたものは、相當長いものでも正しく復舊され得たと思はれる。但しそ

の場合と同じ段の中の文章にかぎる。

右の如き事情に在つたことを想像し得られると思ふ。

今上述の見解をもつて、安貞二年奥書本の組織をしらべて見よう。

○山は・峯は・原は・市は

○ふちは・海は・わたりは

○みささぎは・家は

○たゆまるゝもの・人にあなづらるゝもの

●にくきもの

○心ときめきするもの・すぎにしかた

戀しきもの

●心ゆくもの

○びらうげは・あじろは

○うしは・馬は・ねこは

○雑色隨身は・牛かひは・小舎人は

●木の花は

●池は

●せちは

●木は

●とりは

○あてなるもの

●むしは

●にげなきもの

○瀧は・川は・橋は・里は

●草は

○集は・歌の題は

●草の花は

○おぼつかなきもの・たとしへなきもの

●ありがたきもの

○あぢきなきもの・いとほしげなるもの

●

○こゝろよげなるもの・とりもてるもの

●

○物のあはれしらせ顔なるもの

●めでたきもの

- なまめかしきもの
- ねたきもの
- かたはらいたきもの
- あさましきもの
- うちをしきもの
- はるかなるもの
- せきは・もりは
- つねよりことにきこゆるもの・ゑにかきおとりするもの・かきまさりするもの
- あはれなるもの
- いみじう心づきなきもの
- わびしげに見ゆるもの・あつげなるもの
- はづかしきもの
- むとくなるもの
- はしたなきもの
- つれづれなるもの・つれづれなぐさむもの

五 枕草子の原形は果して「雑纂型」なるか

- とり所なきもの
- なほ世にめでたき事
- おそろしげなるもの・きよしと見ゆるもの・いやしげなるもの
- むねつぶるゝもの
- うつくしきもの
- 人ばえするもの
- 名おそろしきもの
- 見るにことなることなきもの・むつかしげなるもの・えせものの所うる折
- 苦しげなるもの
- うらやましきもの
- とくゆかしきもの
- ころもとなきもの
- むかしおぼえてふようなる物・たのもしげなきもの
- 法華經は・ずほうは
- ちかうて遠きもの・遠くてちかきもの

- 井は・野は
- 上達部は・きむだちは・受領は・權守は・大夫は・法師は・女は
- したりがほなるもの
- かしこきものは
- やまひは
- ふと心おとりするものは
- 風は
- 心にくきもの
- 島は・濱は・浦は
- 寺は・品は・經は・佛は
- 文は・物語は
- 陀羅尼は・讀經は
- あそびは・あそびわざは・舞は
- ひくものは・しらべは・ふきものは
- 見ものは
- おほきにてよきもの・みじかくてありぬべきもの

○人の家につきづきしきもの

○むまやは・やしろは

○岡は

○ふるものは・日は・月は・星は・雲

は

○さわがしきもの・ないがしるなるも

の・ことばなめげなるもの

●さかしきもの

○ただすぎにすぐるもの・ことに人に

知られぬもの

○いみじうきたなきもの

○せめておそろしきもの・たのもしき

もの

●うれしきもの

○うたは

○さしぬきは・かりぎぬは・單衣は・

下がさねは・扇の骨は・檜扇は

●神は

○略は

○屋は

●きらきらしきもの

○見ならひするもの

●うちとくまじきもの

右は安貞二年奥書本によつて、類聚的性質を有する章段を列記したのであるが、○印の附してあるのは本文の短いもので、これ等は紙一面の中に二三段乃至三四段をさめられ得るものであつて、それ等の章段に共通した性質は、多く孤立せず類似した章段と一群をなしてゐることである。●印の附してあるものは、長い本文をもつてゐるもので、それ等の章段に共通した性質は、(一) 隨筆的又は日記的文章によつて前後を圍まれて多くは孤立してゐること(二) 文中に諸本相互の異同が甚だ多いこと(三) その章段中の文章の一部が他本の他の章段中に混入してゐること等である。勿論中には短い文章をもちながら、孤立して隨筆的性質の文章中に混入するものもあるにはあるが、それは例外で、多くの場合は、近似した内容を有する短い章段は一群をなしてゐるのである。こゝに原本の紙一面又は二面にをさめられてゐた組織が、そのまま殘存してゐると認め得られるではなからうかと思はれる。例へば、前記表中の「山は・市は・峯は・原は」の一群、「馬は・うしは・ねこは」の一群、「雑色隨身は、牛かひは・小舎人は」の一群、「瀧

は・川は・橋は・里は」の一群、「上達部は・きむだちは・受領は・權守は・大夫は・法師は・女は」の一群、「寺は・品は・經は・佛は」の一群、「あそびは・あそびわざは・舞は」の一群、「ひくものは　しらべは・ふきものは」の一群、「さしぬきは・かりぎぬは・單衣は・下襲は・扇の骨は・檜扇は」の一群等は、原本の用紙一面又は二面にをさめられ得る長さのものであつて、こゝに、勿論ゆがめられた形ではあつても、原本に或る程度まで近い形が残存してゐるのではなからうかと思ふ。そして、これ等の小群はいづれも分類的形式をもつてゐるのである。

枕草子現存諸本に部分的な分類形式が残つてをり、それが必ず短い文章にかぎられ、長い文章は多くの場合孤立し、しかも文中に錯簡が非常に多いといふ事實は何を我々に暗示するであらうか。何故短い文章にかぎつて同一性質の題材がかく一群をなし長い文は孤立しなければならなかつたであらうか。もし我々がこの形式を古き形として是認するならば、勢ひ「聯想」もしくは「分類意識」といふ事實をも是認する結果となり、従つて枕草子全體がかゝる意識のもとに執筆されたといふ假説を是認する事を拒否し得なくなるではなからうか。

もしこの假説を否定する有力な理由がないならば、我々は枕草子の原本には——少くともその一部分には「分類型」の存したことを認めて差支ないと思ふのである。勿論「分類型」を認めるといふことは、前田家本乃至塚本そのものを認めるといふことでないことは云ふまでもない。又部分的に残つてゐるこれ等の分類形式も、やはり原本そのまゝの形を示すものではなく、後人のさかしらによつて補入、削除、改修等が加へられてゐることは、春曙抄系統本と安貞二年奥書本との間に見える章段の種類及び順序の多少の相違によつても分ると思ふ。たゞ我々はそのゆがめられたる形の中から、ゆがめられざる前の形を透視することが全然出来ないとは、前述の理由によつて云はれないことであると信じたのである。

以上述べ來つたことは、しかし作者の自筆本の出でざるかぎり、あくまでも假説にすぎない。ただこゝには印象批評的考察に對して、極度に恐怖する學究の一人として、あらゆるものがきの中から、二三のまづしい考察と、しかして平凡ではあるけれど、一つの別な試みとを提案して批判を仰ぐにすぎないのである。

(昭和七年六月二十日)